



医歯学系 助教
大澤 まみ OSAWA Mami



医歯学系 准教授
松田 康伸 MATSUDA Yasunobu

専門分野 臨床検査学、分子生物学、データ解析学、消化器内科学

医療・健康・福祉

がん治療患者のプライマリ・ヘルスケア ～ 医・地域・情報連携による治療支援 ～

キーワード 分子標的薬、がん治療、臨床検査学、データ解析学

研究の目的、概要、期待される効果

近年、がん治療を取り巻く臨床現場は大きく様変わりしております。昨今ではがん遺伝子パネル検査も保険収載が可能になり、ゲノムレベルでの治療も可能になりつつあります。しかしながら現状を患者様の立場からみると、遺伝子検査と分子標的薬の発展は、奏効率・医療費などで無視できない現実と向き合うことにもなっています。より安価・容易に、がん患者に適した薬剤の選択・効果予測を行える評価システムの構築は、高齢化社会のわが国における重要課題です。

私たちは、肝がんの分子標的薬（例：ソラフェニブ）の耐性機構の研究を通じて、癌治療薬と既存の臨床薬（例：てんかん薬）の併用が、薬剤の効果を著明に改善すること(図1)や、臨床検査項目のひとつであるウロキナーゼ型プラスミノゲン・アクチベーター (uPA) が、薬剤耐性の標的因子である可能性を見いだしました(図2)。

以上の研究結果は、既存の薬剤や臨床測定項目が、予想以上に、がん治療薬の効果向上・予後予測の評価に有用である可能性を示唆しています。

がん治療薬の効果向上を目指し、既存の医薬や臨床検査を活用は、重要な研究分野です。私たちは、地域の医療機関・自治体と連携を深め、地域のがん患者に役立ちたいと考えています。

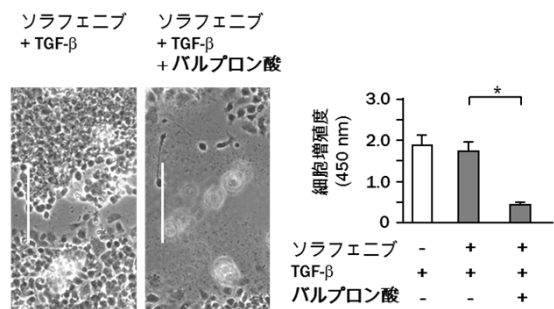


図1 ソラフェニブ・ハルプロン酸(デパケン®)併用による癌治療効果 (左：ハルプロン酸併用により、細胞浸潤が抑制される。右：同併用によりがん細胞数が著減する。Int J Clin Exp Pathol. 2014)

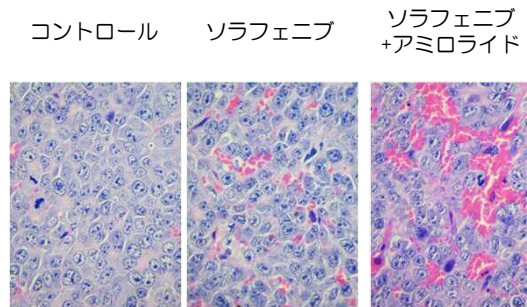


図2 ソラフェニブ・アミロライド(uPA阻害剤)併用による癌治療効果 (左：コントロール、中：ソラフェニブ単剤、右：ソラフェニブ+アミロライド併用投与したマウス肝がん組織。両剤併用により、腫瘍内部が出血壊死する。Anticancer Res. 2021)

関連する知的財産論文等 Matsuda Y, Wakai T, Kubota M, Osawa M, et al. Int J Clin Exp Pathol. 2014; 7:1299-1313
Osawa M, Matsuda Y, Kinoshita Y, Wakai T. Anticancer Res. 2021; 41:645-660
Osawa M, Matsuda Y, Sakata J, Wakai T. Anticancer Res. 2022; 42:745-757

アピールポイント

がんの薬剤耐性機構における基礎的研究の実績があり、本プロジェクトの展開を通して、がん治療効果の改善のみならず、がん患者のヘルスケアへの貢献が期待されます。

つながりたい分野（産業界、自治体等）

・情報工学、地域医療機関、がん患者のヘルスケアのプラットフォーム作りに関わる企業、自治体など